



2022年（令和4年）
2月号（No. 921）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

イグルー登山のすすめ ——古くて新しい冬山技術の再発見

米山 悟

『冒険登山のすすめ』を著した「イグルスキー米山」こと米山悟さんは、「イグルー技術は冒険登山の要である」と言う。軽量で簡便なテントが開発されたためイグルー構築技術は忘れられがちだが、利便性だけでなく自然との一体感や緊急時の適応性など、その魅力を再認識する必要があるのではなからうか。

学生時代以来、30年余りで20泊近くし、興味のある人にイグルーを普及しようと、講習会とウェブサイトで技術を伝え、動画を配信しています。近年は技術を磨き、以前は諦めていた標高や季節での可能性を広げています。

いちばんの魅力は自由と自信

まずテントが要らず、荷物が軽いこと。雪洞と違ってどこでも作

れること（すごく狭い利尻山南稜のテラスでも）。暴風雪でも深く安眠でき、安全な露营地になること。製作に2時間必要な雪洞に対し、40分で作れること（掘った雪を捨てず、ブロックとして使うので早い。整地や撤収の時間を含めればテント設営より短くもなります）。湿気が溜まらず、暖かく、換気もあり、明るく、静か。気温さえ低ければ崩落はない。雪の床なので



1941年、十勝連峰・硫黄山でのイグルー作り

トイレも炊事も楽であることなど。テントと雪洞、両者の良いところ取りです。

いろいろ挙げましたが、一番の魅力は自由と自信です。どこでも泊まれる、荷物も軽い。暴風雪やホワイトアウトでも、山頂だろう

なぜあまり普及しないのか？

慣れないと簡単には作れないからです。季節と標高による積雪条件で雪にはいろいろな状態があり、それに応じて多少作り方を変えます。易しく作れるのは意外にも厳冬期の厳しい場所、初冬や残雪期や低山は少々工夫が要ります。

が大雪山原だろうがそこで寝ちゃえばいい。勝てない境遇には立ち向かわない。絶対に山で凍死する気がしません。それから便利な商品に頼らず、現場の物でやりくりできるといふ強い自信が得られます。雪だけに囲まれて生き延びる満足感と、天然との一体感から得られる、文明社会から孤絶した自由は蜜の味です。山登りの喜びの芯になるのはこれだ、と思うのです。

目次

イグルー登山のすすめ

——古くて新しい冬山技術の再発見 …	1
「年次晩餐会ウィーク」をウェビナーで開催 …	4
東海支部創立60周年記念の集いを開催 …	5
ジャワの最高峰スメルー山の噴火 …	6
追悼 尾崎祐一さんを偲ぶ ……	8
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
③三浦アルプス ……	9
④湘南アルプス ……	10
東西南北 ……	12
活動報告 ……	15

アルパインフォトクラブ

図書紹介 ……	16
新入会員 ……	17
会務報告 ……	18
ルーム日誌 ……	18
図書受入報告 ……	18
会員異動 ……	19
INFORMATION ……	19
編集後記 ……	19

▶ 日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時



絶景の中のイグルー。大滝山山頂から常念岳を望む

つまり、練習で行くような低い（気温の高い）山ほど作りにくいのです。

行動後にくたびれて早く休みたいたときに、わざわざ慣れないイグルーを作るのは非常にズク（信州の方言。惜しまず働く力）がいるでしょう。雪洞は掘るだけでほぼノーテクなので誰でもできますが、イグルーはそうはいきません。焚き火をやるくらいのも、ちょっとした技が要るのです。それからやはり山慣れた人ほど、慣れない技術は億劫です。

でも、私の動画を見て2、3回自分で作ってみれば、誰でも40分で作れるようになると思います。

イグルーを始めたいきさつ

私は北大山岳部の1984年入部で、部員のときは積雪期の日高山脈に登ることばかりを考えていました。ところが、当時の北大山岳部は79年に知床で3人遭難死した事故の影響で、冬季の樹林限界よりはるかに上のテント泊に非常に慎重でした（事故のパーティは暴風雪でテントを潰され、上級生3人は一晩中雪かきをし続けて疲労凍死したのです）。しかし、日高の稜線の長期山行であれば、悪天だからと逃げ込める安全な樹林帯を遠く離れなければ貫徹できません。そこで暴風雪の露营地でも寝て過ごせる切り札として、テントではなく、イグルーを使った計画を実行したのでした。

そもそも北大山岳部には43年1月の厳冬期ペタガリ岳初登頂のとき、イグルーで成功したという輝かしい歴史があります。その3年前に、主力部員8人がペタガリ岳への途上、雪崩で遭難死していた上に、このときは敗戦に向かう間際の最後のチャンスでした。その挑戦でイグルーによる少人数・軽量・速攻方針を採り、見事に成功し

たのです。このように、未整備な北海道の山を開拓してきた北大は、現場の物でやりくりするという探検的な登山が伝統でした。

しかし、戦後は軽量で便利なテントが発達したため、イグルーはときどき練習するだけの存在でした。私も先輩から教わったことはなかったけれど、テントに対する不信というきっかけがあったからこそイグルーを自己流で作り、89年に、なんとか念願の日高の長期縦走を卒業山行としてやり遂げました。しかし、一度イグルーを作れるようになってしまうと、テントを使う必要が全く分からなくなってしまう。便利なものを使おうと、人は能力を一つ失うのだということに気付きました。

独自に見付けた2つの技術と「かるかた雪」を探すこと

さて、イグルーの何が難しいかという点、重力に逆らってなかなか屋根がふさげないことです。円筒形の「サイロ」ではなくドームにするには、重点だけ言えば上下部分で異なる次の2つの技術を使います。

①水平ずらし工法

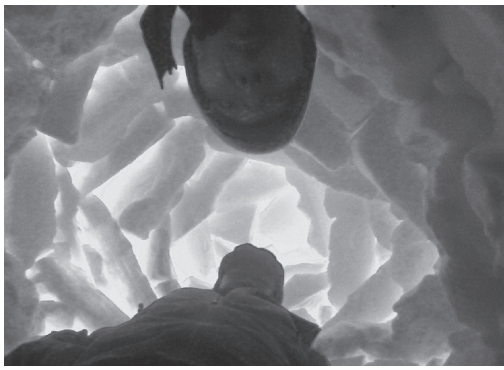
2段目までは上面は平らにして、少しずつ中にずらす技術。

イヌイットが作るイグルーのもりで、ブロックを傾けて載せていくイメージにとらわれると、難しいのでうまくいきません。あれは高度な技術で、誰にでもできるものではないと見ています。40分で作るなら、あくまでブロックの上面は平らに、壁の厚みの部分を十分にとつて、水平なまま内側へ寄せて、壁の内傾を行ないます。パネルのドームではなく、丸いピラミッドです。基盤なので重く大きなブロックでもできる積み方です。

②橋かけ多角形工法

3段目以上は長細いブロックで、円のカーブに橋を架けるように積み、丸穴を多角形でふさぐ技術。

3段目以上になると、①の技術だけでは難しくなります。重く安定しないのです。1段目2段目は、重い雪でも崩れやすい雪でもできるサイコロ状ブロックでも良いのですが、長細いブロックを切る3段目以降は「かるかた雪」の層から切り出さなければなりません。かるかた雪とは軽くて硬い雪、私の造語です。断面を指で押しても差し込めず、鋸でゴギコシしなくて



2012年3月、白神山地の青森・秋田県境縦走でのイグルー

もサクッと切れ目を入れられる硬さです。ふわふわの新雪層をどけた下にある、おそらく降雪後10日ほど経った古い積雪層で、自分の重さでくっついて強度があります。でも、ずっと低温下のため溶けていないので、重くないのです。これは、樹林限界より上の稜線や雪庇を形成するような厳しい所にある雪です。

下界の雪や残雪期の雪は、気温が高くなったときに溶けているため凍って重過ぎて、屋根材には不適切で、積んでも崩れやすいです。このかるかた雪層さえ見付ければ、イグルーの屋根がスイスイとふさがれます。長くて軽く硬いブロック

なら、ドームである必要さえなく、棺桶みたいな形状でもOKです。長細く切っても折れない強度と軽さ、これが条件です。厳しい季節、厳しい場所ほど、このかるかた雪層が豊富なので、イグルーを簡単に作ることができます。

イグルー技術は冒険登山の要

そもそも昔からではありませんが、山登りの世界は、一つはスポーツ派、かたや冒険派です。前者はスポーツ・クライミングやワンデイでの奥山往復、短時間軽量での長距離トレイル・ランニングなどで今、人気です。一方の後者は少数派ですが、私が愛好する「冒険登山」です。できれば未知未踏、記録がご無沙汰のルートを地形図から探し、「もし私がこの山域の最初の探検者だったら」という心持ちで計画ラインを引きます。イグルー登山は、そういう山行に親和的です。どこで泊まるか予定は立たないけれど、どこでも泊まれるし、前進できる天候になるまでイグルーでやり過します。

◇昨年3月、美濃石徹白から白川郷までの6日間の白山縦走では、思っていたより硬く凍った長い斜

面のトラバースが、4日目の行動の終盤に巡ってきましたが、疲れてこういう時間帯にこういう所を通過すると思わぬミスをすると思い、適当な場所でイグルー泊し、翌朝、慎重に通過しました。

◇一昨年の常念岳山行では、松本の実家から見える大滝山の空との境の「決め打ち」の場所にイグルーを作り、故郷の盆地の夜景を見下ろしました。日々の暮らしの中で、いつもそこを見上げます。

◇数年前に、飛驒の弓折岳山頂イグルーから鷲羽岳を長距離往復した帰りに、三俣蓮華岳の南東平原で視界ゼロになったときも、全く動じませんでした。鋸とスコップがあり、どこでもイグルーで寝られる自信があったからです。結局、三俣山荘に手探りで戻って冬季小屋入り口を掘り返して泊まりましたが、イグルーを作った方がよほど早かったと思いました。

北大山岳部の山行は、100年前の草創期から伝統的にこうした「冒険登山」でした。今も奥深さゆえに人が寄り付かない、冬季の日高山脈での長期山行が続いています。特にここ数年の現役や若手OBの活躍は目覚ましく、イグルー

を使った長距離、難ルートの超人的な山行記録を連発して、私の時代には及ばなかった山行をしています。

イグルー登山の広がり

イグルーは古くて新しい冬山登山技術として、特殊な道具もなく、誰でも始められて奥の深い方法です。冬季登山の可能性を広げ、イグルー山行をすることによって主体性と独自発想を磨き、最も重要な天然世界との一体感を経験できます。そして、緊急時の救命シエルトーとしても心強いでしょう。ここ数年は、野心ある若手から講習の依頼が益々増えてきています。より多くの人がイグルー技術を通じて、山登りの真の喜びを知ることになるのではないのでしょうか。

〈筆者紹介〉

よねやま・さとる…北大山岳部OB。松本市出身。NHK報道カメラマンとしてナムチャ・バルワ(91年)など山岳取材を多数こなす。生涯全ての山行記録をヤマレコにユーザ名 yoneyama で登録している。

著書:『冒険登山のすすめ』(ちくまプリマーブックス(2016年)ウエブサイト…やってみよう! イグルー登山 <https://igloosky.com/>

REPORT

「年次晩餐会ウィーク」をウェブビナーで開催

総務担当常務理事 柏 澄子

年次晩餐会は、新型コロナウイルスの流行によって、2年続けて開催することができなかった。年次晩餐会は、図書交換会や山岳写真の展示、秩父宮記念山岳受賞者をはじめとした、その年に活躍した方々の講演があり、最後は一堂に会してテーブルに着き、食事をもにすることで会員の交流の場となっていた。そのために、遠方から出席される会員も多い。

2年続けて中止になるのは日本山岳会にとっても損失は大きく、



南アルプス南部でのエコ登山を紹介した大蔵喜福さん



カナダの山の魅力を語った山田利行さん(右)と谷剛士さん

それに代わる企画をしたいと、夏から理事会では話し合われていた。顔を合わせて交流すること、講演者たちの熱い語りをじかに聞くことに置き換えることはできないが、オンラインを使つてなるべく年次晩餐会に近付けた企画、多くの会員が楽しめるものを考えたい。また、せっかくオンラインで開催するのであれば、会員外の方々にも参加してもらい、日本山岳会を知ってもらう機会にもしたいとも考え、総務委員会、DM委員会、理

事会で協力し、「年次晩餐会ウィーク」を企画した。

2021年12月3日〜10日にかけて、9本のウェブビナー（ウェブによるセミナー）を開催、東京・陣馬山の記念登山と山頂中継を行なった。内容は次のとおり。

法律家の溝手康史さんによる「登山の法律問題」では、仲間同士の登山やリーダーの責任など身近なトピックを取り上げた。「支部からのたより」には北海道支部、福島支部、四国支部、東九州支部が登壇し、それぞれの活動や地元の魅力などを語った。医療委員会が企画した「登山におけるコロナ対策の変遷と展望」は、医師の稲垣泰斗さんがこの2年間、彼が登山の現場のコロナ対策について活動した内容を踏まえたものだった。「山岳登山道と修験の道」は鈴木正宗会員。「超火山だった槍・穂高」では、原山智さんが近年の地震にも触れながら、槍・穂高連峰の地質や地勢の話をした。「置いてくるのは足跡だけ―南信州山岳文化伝統の会の「エコ登山」の試み」では、大蔵喜福会員らが光岳や聖岳周辺で取り組んでいるエコ登山について紹介された。最終日の「知ら

れざるカナダの山、岩、生活」は東海支部会員であり、カナダ在住の山田利行さんと谷剛士さんが登壇。第一線で登っている2人の話は刺激的であり、また、カナダの山の魅力を伝えるものでもあった。

ほかに秩父宮記念山岳授賞式と、大森弘一郎さんと時枝務さんによる受賞者講演を中継。当会らしく、幅広いテーマを取り上げられたのではないかと思っている。

*

これらは当会のYouTubeチャンネルに収められているので、お見逃しの方はぜひご覧ください。また、YouTubeのチャンネル登録もお願いいたします。陣馬山からの中継は本会会員限定公開のため、ホームページからアクセスしてください。

「年次晩餐会ウィーク」はウェブによる、年次晩餐会に代わる初の試みでした。来年度はこれまでのように会員が集まって開催できることを望んでいます。一方で、YouTubeを多用したウェブビナーは、今後も展開していきたいと考えておりますので、会員の皆さんからもぜひご意見やリクエストをお聞かせください。

REPORT

東海支部創立60周年記念の集いを開催

東海支部 今津英一朗

東海支部では、支部の創立60周年を祝う記念の集いを令和4年1月16日(日)、名古屋市内の今池ガスビルで開催した。

この集い、当初の計画より大幅に縮小して実施した。言うまでもなく新型コロナウイルスの急速な感染拡大に配慮したものである。次第は次のとおり。

【I部 式典】 * 支部長挨拶 * 永年支部員表彰 * 60山ラリー表彰 * 記念海外登山計画発表 (1) 第14次インド・ヒマラヤ登山隊..



「60山ラリー」で表彰された支部員・支部友の皆さん

メラック峰(6481m) (2) クインブ・ヒマラヤ登山隊・カンチュンナップ(6013m)北壁

【II部 記念講演】「ヒマラヤ登山今昔」(1)東海支部マカルー登山隊1970..講師II尾上昇氏(同隊隊員) (2)現代ヒマラヤ登山の最先端..講師II平出和也氏

内容に触れたい。「永年支部員表彰」は、石原國利さんと大口瑛司さんである。設立時からの永年表彰であり、現存者はこのおふたりだけとなった。石原さんは九州の在住で、当初、出席予定であったが、これもコロナの影響で急遽、参加を取りやめられている。

「60山ラリー」は、60周年の60という数に因んで様々なコースを設定、60山を登ろうという企画である。「日本百高山」「二等三角点の山」「愛知県の山」など7コースで、それぞれ支部員・支部友の皆さんにその達成数を競い合ってもらった。「記念海外登山隊」は、今年6~7月のインド・ヒマラヤ隊と、同じく4~5月のクインブ・ヒマラヤ

隊の2隊が計画されている。

II部の記念講演「現代ヒマラヤ登山の最先端」は、予定していた平出和也氏が、コロナ感染拡大でこれも急遽中止。今回の記念の集いの目玉であっただけに、平出氏の来名中止は残念であった。参加予定者もコロナ感染も手伝い、当初の130人から90人に減ってしまった。その代わりではないが、平出氏からは、3度目のピオレドール受賞となったシスパーレ峰登攀の動画の提供と、東海支部員宛のビデオ・メッセージが届けられて、現代ヒマラヤ登攀の厳しさの一端に触れることができた。

来賓については、古野会長をはじめ各界からの出席を予定していたが、これもご遠慮願った。さらには、III部として盛大に予定していた懇親会も中止となり、実に寂しい記念の集いとなってしまった。

この集いのほかの記念事業としては、海外トレッキングと60周年記念誌『東海山岳12号』の発刊がある。海外トレッキングは、ヒマラヤ、カナダ、ヨーロッパ・アルプスなどが計画されたが、無期延期に。『東海山岳12号』については、本年中の上梓が予定されている。

今回の記念の集いの実施を巡っては、支部の常務委員会で議論が重ねられている。全面中止も検討されたが、東海支部の設立は昭和36(1961)年で、すでに2回も延期した経緯がある。この機を逃したら60周年という節目の意味がなくなるとの意見が多く、簡素でも強行することに至った。

これらの60周年記念事業とは別に、2021年の春、東海支部主管で「全国支部懇談会」の実施が決まっていた。支部ではちょうど60周年と重なることから、冠に60周年記念を付して実施するとも決め、早々に実行委員会を立ち上げた。実行委員会では、アトラクションや講演会の検討、さらには会場の仮予約まで済ませ、支部ごぞつて鈴鹿の麓に全国から500人の会員を招くのだと大張り切りであった。これも自然消滅である。

この2年間、ほとんどの支部の公式行事が中止もしくは延期となり、支部の氣勢が一気に削がれてしまっている。果たして元のような活気ある支部の姿に戻るのだろうか。今後の支部活動の行方大いに懸念を抱かざるを得ない。

(東海支部総務委員長)

NEWS

ジャワの最高峰スメルー山の噴火

兎玉 茂

昨2021年12月初旬（12月4日から繰り返し）に、ジャワの最高峰スメルー山が規模の大きな噴火を起こしました。日本のニュースでも、大規模な火砕流の煙を背景に逃げ惑う人々の姿が放映されたのでご記憶の方も多いと思います。



2021年12月4日の噴火による火砕流

また、スメルー山の標高や規模が富士山に匹敵することから、最近よく話題になる富士山の噴火を連想した人もあるかと思います。私がかつてこの山の麓で半年近くを過ごしたことがあるため、より詳しい経過や状況を地元ニュースなどから知ろうと努めました。

地図で示したように、スメルー山は独立した火山ではなく、南北方向に連なる火山列の南端にある新期の火山で、日常的に小噴火を繰り返す極めて活動的な火山です。3676mのドーム状の山頂から南東方向へ数十m下った所に火口があり、そこは馬蹄形の火口壁に取り巻かれたジョンダリンスココと呼ばれる新しい火口部となっています。



カリ・レゴヨに架かる吊り橋とスメルー山(2012年)

私の知る範囲では、15分おきくらいに小さく噴火し、ときどき噴煙を大きく上げることもありました。とはいえ、この状態はスメルー山の常態であり、問題なく登山をすることができました。もちろん活動がより活発な場合には当然、登山は禁止になります。

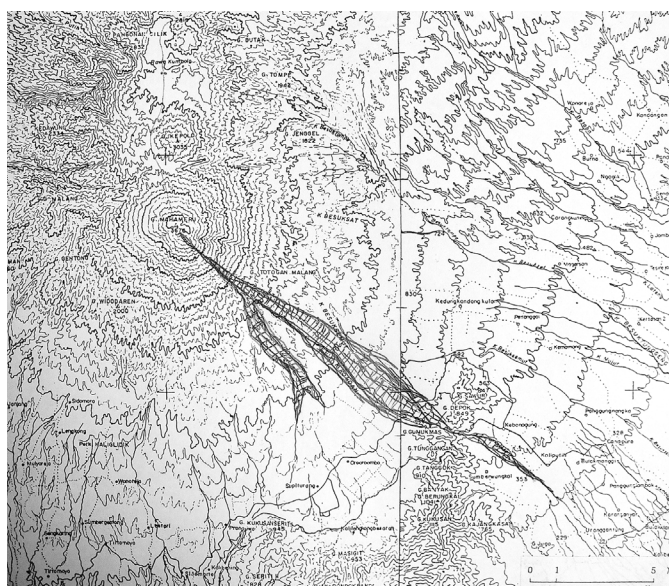
今回の噴火の規模はかなり大規模であつたようです。火口部の周辺全体が大きく崩れて下の谷に落下し、大規模な火砕流となり、膨大な高温の噴煙を伴って一気に押し出し、山麓まで流れ下りました。火砕流に洗われた部分の森の木々は白骨化してしまいました。噴煙



スメルー山頂から見た噴煙を上げる火口(2012年)

は上空1万2000mの高さに達したようです。季節が雨季に入つたときで、谷の水量も増えていたため、少し間を置いて今度は大規模なラハール（火山砕屑物に河水を巻き込んだ土石流）となつて山麓部を覆い尽くしました。厚い所では数m以上の土砂に埋まりました。火道の位置は変わっていませんが、火口周辺と山頂部の形も以前の状態とは著しく違つてしまい、当分の間、登山は全く不可能になりました。

山頂部から火砕流を流す谷は南東斜面に集中しており、記録の残る二百数十年間ほぼ一定し、プス



ブスック・コボカンから流れ出た火山砕屑流とラハールの流域(推定)

ック・コボカンと呼ぶ谷を流れ下ります。この急な谷は標高2000mあたりで二手に分かれ、傾斜が落ちた所で今度は扇状に広がって流れていきます。スメル山南東山麓には「ブスック」と名付けられた谷がほかにもいくつもあり、いずれも火砕流とラハールが流れた跡を残しています。「ラハール」という言葉は火山学の用語となっていますが、もともとは中部ジャワにあるクルッド火山(1731m)の火山性土石流の現地名に由来しています。

今回の噴火は年を越しても活動を続けており、ブスック・コボカンの上部には溶岩が留まっていてそこからも噴煙が上がリ、夜になると不気味に赤く燃える筋を何本も見ることが出来ます。スメル山麓のうち南東側は広大な裾を引いており、傾斜の落ちる標高800m付近に比較的新しい村落がたくさんあり、農地はさらに高い所まで広がっています。今回の噴火では、火砕流現地名ではアワンパナス(熱い雲)と扇状に広がった激しいラハールによって、標高の高い農地の大部分と村落の多く(家屋5000戸)が被災しました。死者・行方不明者数が比較的少なかったのは、2021年に入ってから警戒レベルが上がる噴火が何度か起きており、警戒をしていた

からです。私も何度か通ったことがありますが、ブスック・コボカンの山麓部標高600mのあたりは残丘状に山が連なり、谷が狭まって深さ数十mの峡谷になっています。スメル山の東側山麓からマランなど西側山麓に向かう幹線道路がここを通っていますが、この峡谷部分には、オランダ時代の1930年に架けられた有名な古い高架橋(Jembatan gladak perak)が、つい最近まで使われておりました(2001年に新しい橋が開通した)。この2つの新旧の橋が今回の大規模なラハールによって一気に流されてしまい、流通に多大な障害をもたらしています。

峡谷に架かるこの橋の周辺一帯は木々が枯れて灰まみれになっていることからアワンパナスがこの付近まで襲ったことが分かります。初めにアワンパナス、続いて煙を吹き上げながら流れるラハール・パナス(高温の土石流)が来て橋を流し、さらにしばらく後にラハール・ディギン(冷たい土石流)が幾度も襲ったようです。この橋の下流からは傾斜が緩くなりますが、この流れの先4kmの地点に二輪車が渡れるだけの、兩岸の村をつなぐ小さな吊り橋が架かっています。2019年に流され、ごく最近竣工したばかりの橋です。この地点にもラハールが幾度も襲い、厚い土砂の段丘が形成されていますが、今回はなんとか無事に残りました。当分の間、ラハールによって氾濫原が拡大したブスック・コボカンを対岸に渡るには、この吊り橋しかなくなりました。

先に述べたクルッド山では、ラハールに流され生活基盤を失った農民たちが、スメル山南東麓に移り住んで農地を開いているという話を聞きました。今回の災害で農地を失った人々は、再びの移住を迫られるのかもしれませんが。今回のスメル山の噴火と同じ12月に、中部ジャワの活火山ムラピ山(2968m)も大きな火砕流を再び流しました。この山の麓は人口が稠密なためなのか、被災住民の多くがスマトラやスラウェシに移住したという話も聞きました。火山噴火によってもたらされる噴出物は、長い時間をかければ地味豊かなジャワの大地を形成するわけですが、同時に災害の危険と常に隣合わせでもあるということです。

追

OBITUARY

悼

尾崎祐一さんを偲ぶ

尾上昇

左表の穂高と剣の登攀は、いずれも尾崎祐一さんの初登攀の記録である。これ以外にも厳しいルートからの記録は、多数ある。これを観ただけで、その凄腕ぶりが容易に察せられよう。いずれも成城大学山岳部在籍中の記録である。

成城と言えば、誰しもがお坊ちやま学校のイメージを抱く。その中であって、山岳部だけが異彩を放っていた。それはなんといいても、あの橋村一豊さんの独断的で、

並外れた強烈なリーダーシップに負うところが大きい。

尾崎さんは、岡山県倉敷市の、江戸時代から続く醤油製造業「塩田屋醸造場」の御曹司である。お坊ちやまの典型である。およそ3Kの代表格のような山岳部には、似つかわしくない。尾崎さん「俺も橋村さんの下でよく耐えたもんだ」と述懐されているが、橋村さんは特に尾崎さんには目を掛けていたように、秘蔵つ子だったのである。

私が尾崎さんと初めてお会いしたのは、東海支部のマカルー隊の隊員同士としてであった。私は「成

城の尾崎」と知っていたので、さぞや橋村さん似の偉丈夫で、そしていささかの野人を想像していた。豈にらんや尾崎さん、小柄でどちらかといえば華奢なタイプ。物腰の柔らかい、年若い私が言うのも差し出がましいが、好青年なのである。まさに成城のお坊ちやま。

マカルー隊への推薦は、橋村さんだった。さすが橋村さんの推す尾崎さん、マカルーでもその実力を如何なく発揮する。パートナリとなった田中元さんとともに、いつも厳しいルート開拓の先頭に立っていたし、頂上のアタックでは、田中さんと超人的な活躍で南東稜からの初登攀を勝ち取っている。

それは、アタック・キャンプの7850mから始まる。先行したルート工作隊の2名が、8300m地点でビバーク遭難。その救助と介護に丸一日を費やす。すでに登攀計画の日程は超過。酸素も食糧も燃料も底を突いた。モンsoonも忍び寄って来ている。明日はなに。ラストチャンスに賭ける。

寝たのが午後11時過ぎ、2時間少々の仮眠でC6からアタックに出る。厳しいアップダウンの続く稜線の登降。ついに日没直前の午

後7時、マカルーの絶頂に立つ。下山は夜を徹して下る。午前3時過ぎ、C6に帰還。実に25時間の連続行動である。

このふたりの記録は、多くの日本人登山家に大きな勇気を与えた。「彼らにやれるなら、俺たちにだって」と。その後、日本からヒマラヤのジャイアンツのバリエーション・ルートを目指す登山隊が陸続と日本を発っているのが、その証左である。ふたりの行動は、そして東海支部のマカルー隊は、ヒマラヤにバリエーション時代の幕開けを告げる嚆矢となったのである。

その後の尾崎さんである。1973年、母校のジャヌー（現・クンバカルナ）偵察隊に加わるが、以降、厳しい登山とは一線を画し、社業に邁進。そのかたわら地域の様々な社会活動に携わっている。昨年11月、享年82で逝去。戒名「嶽士鉄人居士」。なんとこの戒名、ご自身の命名なのだそう。成城の山岳部OB会「岳士鉄人会」に由来しているのは、言を俟たない。

私は、尾崎さんの「青春を雪山とともに燃やした」という誇りが、ひしひしと伝わってくるのを禁じ得ない。（東海支部常任評議員）



尾崎祐一（おざき・ゆういち）

会員番号5822

1939年 倉敷市児島田の口生まれ。成城大学経済学部卒業
1959年冬 北穂高岳・滝谷C沢右保奥壁
1961年冬 剣岳・チンネ左方カンテ
同年冬 剣岳・池ノ谷右保中央稜
同年冬 前穂高岳・東壁東稜
1962年夏 前穂高岳・北尾根IV峰正面壁成城大ルート
1969年春 東海支部マカルー調査隊
1970年春 東海支部マカルー本隊に参加、南東稜から初登攀に成功
1973年春 成城大ジャヌー偵察隊
2021年11月14日 逝去、享年82

連載■で当地アルプス登山案内③

三浦アルプス

神奈川支部 永井泰樹



仙元山頂上から江ノ島、富士山方面を望む

「三浦アルプス」は神奈川県三浦半島を東西に横断するような山稜で、葉山町、逗子市、横須賀市の境界エリアに位置している。標高は200m程度の低山だが、アップダウンが多い。また、登山ルートは多岐にわたっている。富士山や東京湾の眺望などが楽しめ、日帰りハイキングコースとして人気のあるエリアだ。

今回は、代表的な縦走コースとして、西側の風早橋からスタートし、仙元山から南尾根と呼ばれる

山稜を縦走、観音塚、乳頭山を通り、田浦梅林へと下っていくコースを紹介する。登山適期は7・8・9月以外の時期を推奨したい。

【コースガイド】

JR逗子駅、あるいは京急逗子・葉山駅からバスに乗り、風早橋にて下車。そのままバス通りを南に進み、トンネル(葉山隧道)手前の丁字路交差点を右折し、県道207号を直進する。やがて信号機のある木の下交差点に出たら、左手に見える急坂をUターンするように登っていく。前方に葉山教会が現われ、教会の左手から仙元山への登山道が続いている。

樹林帯の中を進んでいくとやがて視界が広がり、仙元山の斜面を登るようになる。登り終えると仙元山頂上(118m)だ。ここからは眼下に葉山の街並みが見渡せ、その先には江ノ島や富士山、丹沢山塊などの眺望が広がる。三浦アルプス屈指のビューポイントだ。

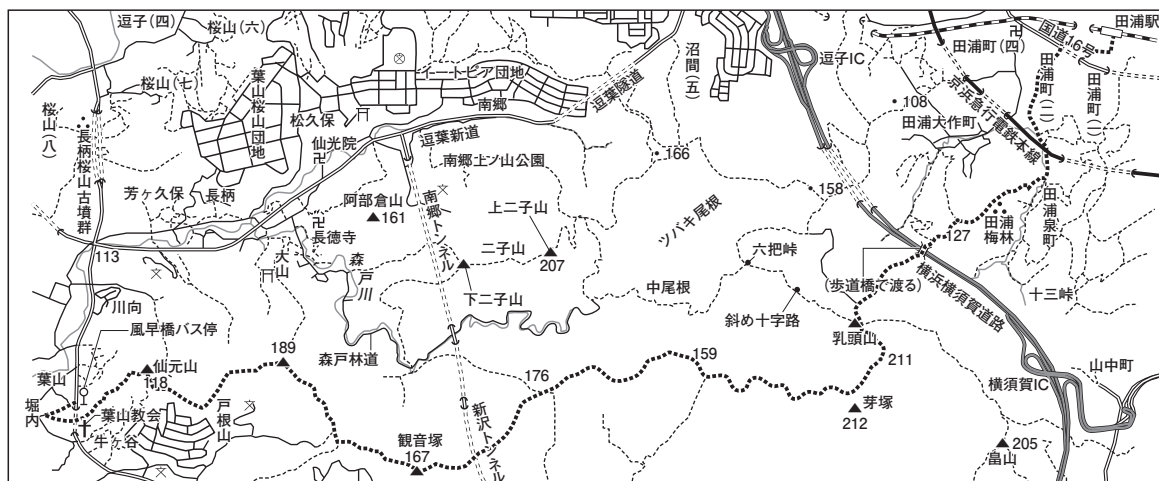
この先からは、アップダウンの

連続となる。道の分岐点には道標が立っており、進路方向を確認しながら観音塚へと向かう(三浦アルプスの分岐点には道標が立っているが、見落としに注意)。

仙元山から2km歩くと、観音塚(167m)のピークに到着。ここには、年号が「寛政」と読める石仏が鎮座している。その後もアップダウンが続き、マテバシイの並木や、左右がササに覆われるような光景に出くわす。だが、現われる道標は乳頭山を指しており、その方向へ進んでいけば良い。

やがて左手に森戸川林道(正確には三浦大山林道)終点への分岐点を通過。続いて「大桜」と道標の柱に書かれてある所でヤマザクラの大木を見ると、この先は急な下りとなり、ロープが設置してある。新沢停留所分岐点を2ヶ所過ぎた後、しばらくすると送電鉄塔(東京南線3・4号線34号鉄塔)の横を通っていく。

その後、乳頭山・上山口小



学校分岐点に到着するが、直進して乳頭山へ進む。右手に畠山分岐点を見た後、正面の登りをクリアすれば乳頭山頂上だ。ここからは樹林の間から東京湾方面の風景が望める。

乳頭山の下り始めでは、斜め十字路と把峠方面（道迷いエリア）への道に誘導されないように注意しよう。気を付けながら下ると、左側にFK1分岐点の道標が見付かる。ここで右折して、京急田浦方面に進む。そして、大岩のある急斜面を下った後、田浦梅林分岐点（FK2分岐点の道標あり。ここも要注意）にて右折し、田浦梅林方面に進む。



2月中旬～3月中旬、約2000本の様々な梅が楽しめる田浦梅林

すると、いきなりロープのある急斜面となる。ここを注意して下った後は尾根筋に沿って下つていき、横浜横須賀道路を陸橋で渡る。

陸橋を渡った後、少し登れば田浦梅林の展望台だ。ここからは、360度の展望が開ける。梅林エリアを下つていくと、平坦な住宅街となる。京浜急行の線路を潜った後、国道16号に出たら右折し、トンネルを抜けて左折すると、ゴールのJR田浦駅が見えてくる。

【コースタイム】 風早橋バス停（10分）木の下交差点（15分）仙元山（1時間）観音塚（35分）林道終点分岐点（1時間）上山口小学校分岐点（20分）畠山分岐点（5分）乳頭山（5分）田浦梅林分岐点（15分）横浜横須賀道路陸橋（15分）田浦梅林展望台（35分）JR田浦駅

【入山口へのアクセス】 JR逗子駅、または京浜急行逗子・葉山駅から次の行先の京急バスに乗車する。佐島マリーナ入口、長井、葉山、大楠芦名口、横須賀市民病院、（葉山大道経由）衣笠駅、（葉山大道経由）湘南国際村センター前

【地図】 国土地理院2万5000分の1地形図「鎌倉」「横須賀」

（神奈川支部事務局長

連載■ご当地アルプス登山案内 4 湘南アルプス

「湘南アルプス」とは神奈川県の大磯町、平塚市に位置し、高麗山、浅間山、湘南平辺りの山並みをそう呼んでいる。標高は全て200m以下だが、自然が残っており、湘南平は見晴らしが良く、360度の眺望が楽しめる。また、ここには日本山岳界の先駆者、岡野金次郎翁の碑が建っている。

今回はJR大磯駅からスタートし、高麗山から浅間山、湘南平と縦走した後、高田公園へ下り、JR大磯駅に戻ってくる周囲コースを紹介する。登山適期は7・8・9月以外の月を勧める。3月末～4月上旬は、湘南平の桜が見ごろとなる。

【コースガイド】

JR大磯駅から東海道線沿いに東京方面へ進み、丁字路に出合った所で右折する。国道1号に出たら左折し、約120m進んだ所で左のY字路に進む。周囲は住宅街だが、所々に松並木が現われ、旧東海道の名残を見せてくれる。前方

神奈川支部 永井泰樹

に東海道線が近付いてきたら、東海道線の下を潜る歩行者道が見えてくるので、その坂を下つていく。東海道線の下を潜った後も直線状の道を進んでいく。すると国道1号が右から合流し、そのまま東京方面に進んでいく。約250m先に高来神社入り口があり、左折すれば立派な鳥居が目に入る。奥が高来神社だ。

登山道は、この神社の右手奥から始まる。すぐ先で登山道は左・男坂、右・女坂に分かれるが、どち



エノキの大き木がそびえ、石祠が祀られている浅間山頂上



相南平に建つ岡野金次郎翁の顕彰碑

らを進んでも高麗山の手前にて合流する(男坂は急坂)。この高麗山南斜面は江戸時代以降、大きな伐採がなかったため、スダジイ、タブノキのほか、アラカシ、カゴノキなどの常緑広葉樹やケヤキ、イロハモミジなどの落葉広葉樹、モミなどの針葉樹が混在している。このため登っている間、眺望はあまり利かない。男坂と女坂が合流した後、古びた石段を上っていくと大堂と呼ばれる広場に出る。ここが高麗山(168m)頂上だ(正確には少し先に高台がある)。ここにはベンチが設置されているが、相変わらず樹林の中である。また、「高麗と若光」と題して高句麗の王

族のひとり、高麗若光^{こまのじやくわう}についての説明板が立っている。

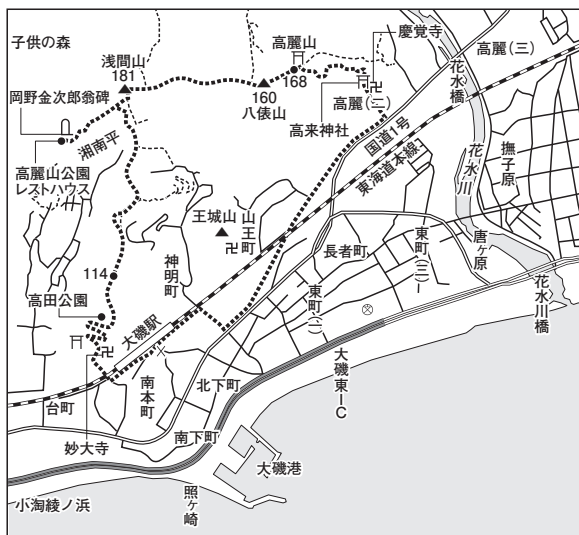
高麗山を出発し、西側への山道を進むと、すぐにベンチのある八俣山(160m)の頂上を通過する。ここは、八俣山の標識がなければ頂上とは思えない箇所だ。

ほとんどフラットな尾根筋を進む。周囲にはイヌシデ、クスギ、タブノキ、ツバキなどの木々が目に入る。緩やかな登りを進み、右手にミズキ、エノキ、クマノミズキなどの樹木を見ていると、浅間山(181m)頂上に到着する。ここには浅間神社の石祠と一等三角点が設置され、エノキの太木と浅間社の説明板が立っている。

浅間山から西へ200m進むと高田公園分岐点となり、ここからさらに200m進めば湘南平だ。目の前に巨大なテレビ塔が現われ、その先へ進むと広場に出る。桜の咲くころであれば、花見客でにぎわうエリアだ。展望台上に上れば、大山や丹沢表尾根、富士山、相模湾などの眺望が得られる。今回の縦走において一番のビューポイントだ。また、ここには観光客用にレストハウス(レストランや別の展望台あり)もある。

また、ぜひ見ておきたい場所として、ここには岡野金次郎翁碑が建っている。説明板には、岡野と小島烏水が日本人登山家として初めて槍ヶ岳の登頂を果たしたこと、その翌年、岡野らはウォルター・ウェストンと出会い、日本にも山岳会を創ることを勧められ、これが日本山岳会の設立につながったことなどが書かれている。

湘南平からの展望を堪能した後、高田公園分岐点まで戻り、右折して尾根道を進む。途中、楊谷寺谷戸横穴群への分岐点を左に見る。常緑広葉樹と落葉広葉樹が混じったアップダウンの道を歩いていくと、東小磯配水池という円柱状のタンクの横を通り過ぎ、やがて左側に民家が見えてくる。舗装路との合流点には、大磯町の観光案内板があるので現在位置を確認しよう。合流点からは、舗装路の登り坂を進む。登り切った後は、未舗装の平坦路となる。下り坂になると、正面に高田公園が見えてくる。



高田公園を過ぎると住宅街となり、大磯の街並みと相模湾が見渡せる急坂を下っていく。下り終えたら、妙大寺の前を通り、東海道線のガード下を潜った後、左折して線路沿いに進めば大磯駅だ。

【コースタイム】JR大磯駅(25分) 高来神社(25分) 高麗山(30分) 浅間山(15分) 湘南平(5分) 高田公園分岐点(30分) 高田公園(20分) JR大磯駅

【地図・参考資料】国土地理院2万5000分の1地形図「平塚」大磯町観光情報サイト…高麗山(湘南平) (同前)

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

群馬のヤブ山④ 栗木立へククリ岩 (1655m)

中山達也

・群馬県甘楽郡南牧村羽沢
・2・5万図Ⅱ十国峠
・2017年6月初旬登山
栗木立より別名のククリ岩の方が知られているだろう。2・5万

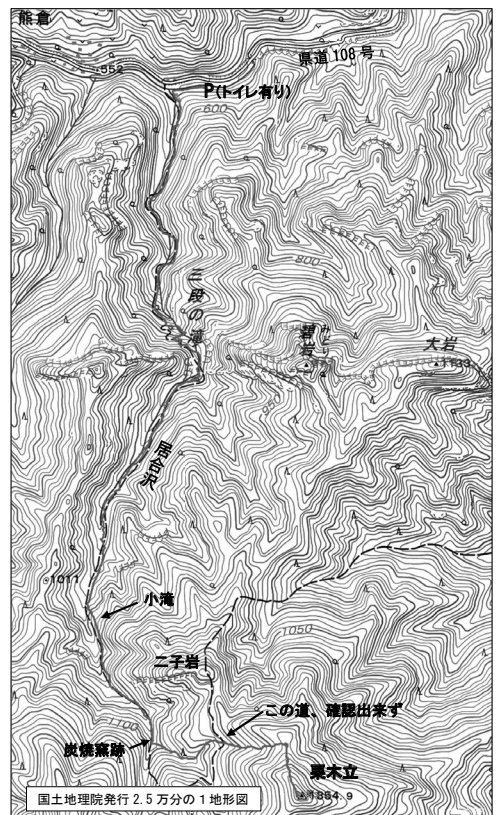


雑木林に囲まれた栗木立山頂

図に山名の記載はなく、三段の滝の南南東約1・5km（直線）にある1354・9m峰。

南牧村の県道93号を西に走り、勸能集落外れのY字路に「三段の滝、象ヶ滝」の案内看板がある。案内に従い、左の県道108号に入り約1km、左（南）の小橋を渡ると三段の滝の駐車場、トイレがある。三段の滝下までは遊歩道になっているが、滝上部に登る所が急傾斜で注意が必要。最上段に登り、岩を回り込むと碧岩で、大岩と二子岩への案内がある。二子岩への案内に従い、居合沢を南に向かう。地形図に破線が描かれているが踏み跡はほとんどない。

950mコンター付近で小さなゴルジュになる。小滝がいくつかあるが、右岸を高巻ける。それ以外は平凡な沢で歩きやすそうな所を行けば良い。小滝の先で二子岩西端を回り込むと、左（東）から涸



沢が流入するが直進。さらに100mほど進むと流れのある小沢が左（東）から流入する。

この合流部に炭焼窯跡があった。この枝沢に入り、しばらく登ると二股になる。左（北東）の沢を選んだ。すぐ水流はなくなり、開けた明るい源頭でヤブもほとんどなく歩きやすい。登り詰めると栗木立北の稜線に出る。南に折れて、少し急登だが20分弱で三等三角点のある山頂に着く。雑木で展望はない。古い菱形のブリキ板があり、かろうじて「ククリ岩」と読めた。三段の滝駐車場から登り約3時間、3時間半。二子岩、大岩、碧岩と合わせても歩けるが、その場合は

20mほどのロープがあった方が安心だろう。このコースを往復する限りロープは必要ない。

この群馬のヤブ山で登山の対象としているのは三省堂出版の『日本山名事典』に記載されている山（地名）だ。したがって、国土地理院地形図に山名の記載がない山もある。地図は国土地理院地形図をカシミールで切り取って使用しているが、拡大・縮小してあり、縮尺は正しくない。登山軌跡はガーミンハンディGPSの軌跡だ。

〔注〕記述は登った当時のもので、2019年の台風で状況が大きく変わっているようだ。踏み跡が不明瞭な所もある。最新情報で

の確認を願う。地図、コンパス(GPS)は必携。
(群馬支部)

秋田・神宮寺岳にもクマが

今野昌雄

昨年3月8日午後4時ごろ、私たちの街のシンボル、神宮寺岳(277・2m)で自分のストックが届くすぐ目の前に、体長約1mのクマが出た。その日は、堅雪だったので、夏場は入らないヤブの上の凍った残雪を踏みながら下っていた。「がさつ、がさつ」と音がし、一瞬何かなど思いながらも、雪の下枝が鳴ったのだろうとそのまま足を出したとき、ゴーグルの前に現われたのがクマだった。

抵抗しても2本のストックはすぐ折られてしまうだろうから、驚きながらもクマから目を離さず、ほかにもクマがいらないかを確認しながらその場から離れた。

翌9日も入山。ヘルメット、ピッケル、ナガサ(山刀)、デジカメを身に着けて前日より少し離れた所を通過した。クマは昨日いたあたりの、木のそばから私の動きに合わせて向きを変えていた。10日、

クマは陽の射し込む所で日向ぼつこのよう。周りはまだ残雪。11日、クマの姿見えず、と思いきや倒木の下に真つ黒いものが見えた。

12日、曇り。万全の装備で寝ているクマに近付く。呼吸しているのが分かる。右手にナガサを掲げ、左手のデジカメで写真を撮る。子どもたちから親しんできた神奈備の山だが、最も緊張し集中したときだった。ほかの山でのことだが、今まで5名の登山仲間がクマの被害(3回はへり出動とのこと)で入院した。

その後、3月17日以降は全く姿が見えなくなった。4月3日、曇り。沢の雪も消え、野鳥の声を聴



山頂の嶽六所神社の脇にいたクマ

きながら登る。坂を上り切ると、山頂の嶽六所神社(かつて県内三式内社の一つ副川神社があった)の脇にクマはいた。木の陰から写真だけ撮ってその場を離れた。その後、夏も秋もクマは見えない。

今から三十数年前、森吉山麓の杣温泉では親子グマを飼っていた。その子グマとじゃれて遊んだが、生後4ヶ月でも仰向けにするにはそれなりの力を要した。これ以上成長すると手に負えなくなると言われ、納得したものだった。

神宮寺岳は3月の町内の梵天奉納以外、4月のカタクリ、オオイワウチワの花のころと秋の紅葉時でも静かな山である。県外からの登山者たちも奥羽山脈の和賀岳(1439・4m、一等三角点、薬師岳へ登山に来て、天気が悪いときには大平山(姫神山387・3m)や神宮寺岳に変更したということもあった。出羽山地の一部で、雄物川越しに大曲花火会場の背景の山で反響音効果が良く、街からも近いハイキング向きの里山だ。

神宮寺岳や姫神山は少年のころの遊びの場でもあった。今回のクマとの遭遇は今まで国内外、東西南北多くの方々のお世話になりな

がら、失礼の多かった自分を意識させてくれた。一昨年、昨年と私たちの中学校傘寿の会もコロナ禍で2度延期後中止になった。人もクマも自然の一部、クマにはこの

「会員優待サービス」変更のお知らせ
《会員サービスWG》

＊【那須・奥鬼怒・日光・尾瀬】原の小屋／①②の電話番号を「090-8921-8314」に一本化。

＊【北アルプス】朝焼けの宿・明神館／宿泊料金の500円引き(要電話予約)に変更。

＊【同】上高地徳沢ロッジ／宿泊料金の10%引き↓500円引きに変更。

＊【四国・九州】剣山頂上ヒュッテ／「宿泊料金の500円引き」を「粗品プレゼント」に。電話番号を「080-1299718482」

②同左にそれぞれ変更。

＊【同】雲仙温泉・青雲荘／入浴休憩料「700円(税込み)↓600円」を「880円(税込み)↓780円」に変更。

＊【同】国民宿舎久住高原荘／名称を「久住高原ホテル」に。サービス内容も「入浴料500円↓300円」にそれぞれ変更。

山に棲みついてほしくないが、これからも山に感謝しながら暮らしたい。

(前秋田支部長)

与九郎橋と牛番小屋

牛丸工

古い手書き図絵を松本市立博物館のS学芸員に見せてもらった。『明神』という文字と『鳥居』の記号があるから、これは上高地明神一帯の図絵であると直感した。年代が分からないが、良く見ると小屋らしきものと、橋が一つ。橋のよななものに×印をしてあるのが2ヶ所あることが読み取れる。東西南北の位置関係も現代の地図に合わせてみたところ、明神地籍と一致している。

右端に『徳元』の文字も見える。

最初見たとき、徳本峠はこの図絵では南の方角であるから、徳元は峠を指すものではない、と考えた。現在の地図と比較し、徳本峠の位置は古図でも現代でも、明神館の位置から右に寄るので、『徳元』とは峠への道(入り口)を示しているのである。この図絵の中に、今までその位置が特定できなかった

上高地・明神一帯の図絵



『牛番小屋』と『与九郎橋』が描かれていることが注目される。

【牛番小屋】

まず上高地に牛馬が放牧されるようになったのは、鳥々の上條百次郎・高見沢恵久・上條富蔵らによつて明治17年4月22日申請、12月許可、翌年5月から放牧を開始しているの、地図は江戸時代のものではなく、明治18年以降作図と考えることができる。また、牧場が閉鎖されたのは上高地が国立公園に選定された昭和9年であるから、それまでの期間であると、限定できる。いくつかの文献に登場する呼称は、単に『牛番小屋』や、

『徳五の小屋』、『徳吾の小屋』などがある。丁寧な言い方で、『徳吾の牛番小屋』もあり様々であるが、『徳元』は初めて見た。また、『徳本の牛番小屋』というのはいまだ見たことはない。

小屋の位置は現在の明神館と明神橋の中間あたりの散策道より少し下流の辺であろう。大きな川は梓川で、小さな川は、梓川の枝分かれた流れではなく、よく見ると、湧き水であることが分かる。河床が上昇したためか、現在この付近に伏流水の流れは普段は見掛けないが、明神館の近くに小さな池がときたま出現しているのは、伏流水の名残であろう。

現在の技術はすごい。牛番小屋の位置を現代のGoogle earthと図絵を比較することによつて、およその位置が確認できる。図絵で川ではなく湧き水が流れているが、Google earthでその水路をはつきりと読み取れる。明神館と明神橋の中間あたりに上下に森が切れているように見える線がある。これが左右に流れる水路であろう。地図と照らし合わせて小屋はこの切れ目の線の梓川寄り、およそ当てはめることができる。木々を切

り、小屋を建てたようで、その箇所だけ周囲と木々の植生が違うように見ることができるのである。

【与九郎橋】

河童橋が架設される以前に上高地には『与九郎橋』があった、といくつかの山行記録に記述がある。しかし、その場所は明神付近ではないか、ということしか分かっていなかった。最初の図絵、東の文字の上に×印のものと橋のようなものが描かれている。×印は橋を保護する『牛枠』のような気がする。梓川は雪解けと大雨が重なると相当量の水量になり、水位は上がり、簡単な橋はすぐに流されてしまう。多少の大水から生活道である大切な橋を守るために考えたのが、『牛枠』の設置であろう。橋の上流に設置することで、橋を守っているような構造である。

絵図の左にも×印が2つあるが、これも牛枠で、こちらは伏流水の小川なので、大水になることはない、橋のように扱われているのであろう。この2つの牛枠から、与九郎橋と言われる橋は図絵の右側にある牛枠と並んで設置されている、梓川に架かる橋と推測できる。左は伏流水の小川なので、名

前のない小さな橋であろう。

「杣小屋でない理由」

江戸時代に四ヶ村（大野田、島々、稻核、大野川）では耕地が少なく、寒過ぎて、稲作が行なわれないので松本藩に収める年貢を木材で納めていた。上高地には木こりが寝泊まりする杣小屋が各地にあったという。

単純に考えて、このような中州のど真ん中に木こりは小屋を造るであろうか、というのが素朴な疑問である。古代より、村・集落は平地にはなく山に近い、水のある所である。それは水害を恐れたからであり、梓川はしょっちゅう大水が出る。いくら中州の森の中と

いえども、水は溢れてくる。そのような所に杣小屋は造らない。牛の番をする小屋だからこそ、また牛には水が必要だからこそ、中州にあっても不思議ではなく、牧場の中に小屋を造るのである。

「営林署の小屋ではない理由」

明治以降、上高地一帯は国有林になり、営林署が管理していた。明治25年、ウェストンが最初に槍ヶ岳に登頂したとき、途中の横尾付近で野宿している。横尾には営林署の小屋（避難小屋）があったが、それはいつのころからあったか不明である。明治36年8月20日と21日に5人の米国人が横尾の小屋で2泊したが、それかもしれない。

多数の利用申込みが殺到し、調整の結果、この時期でしか空きがなかったためだ。

今年度は25回目ということもあり、写真集作成などの企画を検討したが、費用もかさむために通常の全紙版展示のほか、山で出会う動植物の写真を半切版で展示することにした。会員より作品を募り、審査の結果、10点の動植物（動物2点、植物8点）が選ばれ、合計で50点の作品が展示された。展示方法も国内・海外別に1月から順に月を追う形で展示し、最後に企画展の動植物の写真を置き、来場者が四季の移ろいを感じることができるようにした。

鋭い岩峰や厳冬の山岳など荒々しい風景の写真が多いなか、



日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

アルパインフォトクラブ 第25回写真展「心に映る山々」開催

2017年度の写真展は、例年

より約1ヶ月早い10月12日から18日まで、東京都新宿区四谷のポートレートギャラリーで開催された。例年より早くなったのは、ポートレートギャラリーの人氣が高く、



写真展会場の様子

寄附金および助成金などの受入報告(12月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、そのほか
井藤 恵美子 会員	50	日本山岳会自然保護委員会活動費
立花 種則 永年会員	10	日本山岳会運営資金寄付
株式会社センコー技研	100	岐阜支部設立50周年記念事業・支部活動への援助
梅田行政書士・社会保険労務士事務所	10	岐阜支部が行う新入会員のための入会金の補助
日向 祥剛 会員	300	北九州支部ルームの運営資金寄付
新潟県山岳協会	40	第4回糸魚川ジオパーク子供登山教室活動費補助
新潟県三条地域振興局長	50	弥彦・国上エリアの持続可能な利用を促進するプロジェクト活動費

かわいらしい動物や可憐な高山植物の写真に多くの来場者、特に女性がその前で足を止めた。「きれいな」「どこに咲いているのかしら」などの声が聞かれ、企画展は好評であった。

ここで簡単に写真展25年の歴史を振り返ってみよう。第1回は1993年で、三省堂のギャラリーを借りて行なった。このときはタイルの壁にカーテンレールを付けて吊るすなど、会員がすべて手作りで行なった。ここで第9回まで写真展を開催し、第10回から第13回までは新宿野村ビルの特設会場で開いた。そして、第14回から現

在までの12回をポートルートギャラリーで行なっている。ポートルートギャラリーはスペースもあり、また、照明装置も整っているので写真が引き立って見違えるようになった。

なお、今回の来場者は560名を超え、昨年を上回った。また、作品はこの後、年次晩餐会(12月2

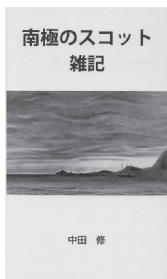
日)で展示される。その後、伯爵国山岳写真美術館(4~5月)、酒田市総合文化センター(6月)、長野市柏与フォトサロン大門(9月)、高尾599ミュージアム(10月)で巡回展示される予定である。ご来場いただければ幸いである(詳しい日程は後日、会報「山」に掲載します)。(松永秀和)



図書紹介

南極のスコット雑記

中田 修著



2021年11月
羽衣出版
B6変形判
909円+税
250頁

「科学と地理学を合わせた組織だったら私はスコットを選び、冬旅行ならウィルソンだし、極点へ突進あるのみ、ということならアムンセンだ。そしてひどい穴に落ち込

んでそこから抜け出したいなら、常にシャクルトンだ」と書いたのは、スコット隊のチェリー・ギャラードである。

中田修さんは、このギャラードの『世界最悪の旅』を初めて全訳した人である。それまでは加納一郎氏が翻訳した本がずっと読まれてきたが、なんとその本が出版されたのは1944年の戦時中である。私も加納氏の本を読んだ。後から知ったことだが、全訳ではなく、抄訳になっているようだ。

加納氏の本は文庫本で読めるが、中田氏の全訳本は4cm以上も厚さのある単行本である。この全訳本を書いたときのこと『雑記』に出てくる。

ギャラードはスコットの極点探検への支援を行なっているが、『世界最悪の旅』は、極点への探検旅行ではなく、ウィルソンなどと皇帝ペンギンの営巣地へ向けて、真冬の南極を科学調査に出掛けたときのことを指している。

では、スコットの極点探検への旅を書いた本としては、何を読めば良いのか。

私が最初に読んだのは、本多勝一氏の『スコットとアムンセン』であった。私は、高校生のときに読んだ『ニューギニア高地人』や『カナダエスキモー』の本が強い印象を持って心に残っていたので、真つ先に本多氏の本に手が伸びたのである。

実は、今回紹介する『南極のスコット雑記』の半分は、本多氏の『スコットとアムンセン』が収録された『本多勝一集28』の後半にある、北村泰一氏と本多勝一氏の対話による論評に対して、事実との食い違いを指摘する内容になっている。

この対話の最初の方に「科学調査は、極点競争でアムンセンに敗れた言い訳のように聞こえる」といった言葉が出てくる。しかし、スコットたちは言い訳もしていないし、けっして言い訳程度の調査をしているのではないことを中田さんは検証している。

アムンセンの『南極点』を中田さんは翻訳しているが、その中で、アムンセンは最初から「科学のめんどろは見ない」と言い切っているのである。つまりアムンセンは、いかにして南極点に一番乗りするかに目標を絞っているのである。スコットとアムンセンでは、そもそもスタンスが違うのである。

また、本多氏の本では、スコット隊に階級差別があったことが書かれている。しかし、軍人であることや、当時の習慣から階級による区別があったとしても、もっと仲間としてお互いを認め合っていたことが中田氏の読み解いた解説から分かる。中田氏は英文学が専門なので、原書を丹念に読み込まれ、自分の先入観ではなく、書かれている文章が正確に伝わるように翻訳を心掛けられている。スコットたち、極点探検をした

人たちは、極点からの帰途で全員亡くなっているのです、探検の様子を知るには残された日記や手紙を読むしかない。スコットは細かい日記を残しているが、それを全訳したのも中田修氏である。

私のように、本多勝一氏の『アムンセンとスコット』しか読んでいない人は、この本を読むと、スコット探検隊に対する認識が変わるかもしれない。また、『雑記』の前の『南極のスコット』は清水書院の新书判で出ているので、こちらも読まれることをお勧めする。

(北島洋二)

三宅 岳著

山に生きる 失われゆく山暮らし、山仕事の記録



2021年9月
山と溪谷社
四六判 208頁
1600円＋税

写真家の三宅岳さんは20年以上前に『炭焼紀行』（創文社）という写真に多くのページを割いた本を上梓している。長きにわたり山仕事に焦点を当てた取材をしていた

わけだが、今回の本では炭焼に限らず、今となつてはどこにも見掛けることができなくなった山仕事も含め、様々な山人の暮らし・仕事を追い、まとめている。

その多くが季刊誌『山の本』（2016年春／18年春／白山書房）に連載されていたので、筆者も毎回それを楽しみに読んでいた。が、今回新たに2021年現在の最新情報やその後を加筆し、書き下ろしコラムも加えた形の一冊となり、個々の山人の仕事ぶりとどまらず、長年にわたる日本人の木・自然との関わりまでが俯瞰的に見詰められるような記録として、より価値が高まった。

内容としては、ゼンマイやタケノコ採り、炭焼、サンショウウオの漁、大山独楽や立山のかんじき作り、漆掻き、様々な形での木材の搬出・運搬、最後には阿波のばん茶作りまでと多岐にわたる。

巨樹の運材に限らず、山菜など山の恵みはすべて山から人里に下りてきてこそ、恵みになるのだと著者は語る。そして、独楽やかんじきの原材料も木であり、ばん茶を蒸す燃料も木材である。

「運材は決して派手な仕事ではな

い」が「しかし、人々の生活の根底を支える重要かつ大変な労働であった」と記す。かつて動力のない時代に、人々はいかにして山中から何もの巨大な木材を運び出したのか？「体力と智力をもつて、その労働に真正面から向かっていった」今は失われつつあるその現場・人を探し求め取材する。

その一つに木馬曳きがある。「二本の木を並行に並べ滑走面とし、そこを底面として、何本かの木を渡して荷台とする」との説明だが、もちろん動力は人力である。「とにかく人力で全身全霊を傾けて木馬を曳く」という文章からは、その仕事の荘厳なまでの人の力の極限が伝わってくる。数百kgという材を、それこそ命懸けで運ぶのだ。

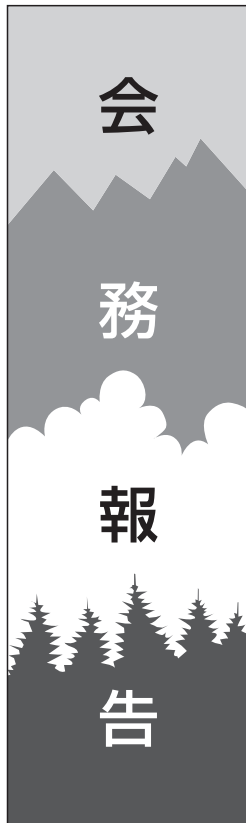
現在、林業界では加速度的に機械化が進み、山を歩いていても突然丸裸になり、どこまでも見通しの利く皆伐された場所に飛び出し、驚くことがある。少人数での大量伐採・大量搬出、それは材価低迷の林業生き残り策ではあろうが、大型の重機を入れるために林道も幅広く取られ、後には荒涼とした景観が残るばかり。しかし、そうした時代の流れに押し流されずに踏

ん張って復活した馬搬が、別の章では紹介されている。馬搬は道整備にかける労力が少なくて済む利点があり、それゆえに車両による搬出に比べ山が荒れない。

しかし、ここではそうした利点以上に、著者は馬搬現場のみでなく、馬主の思いや生き方、世話をする馬との関わり、生活の始終、その厚情の姿に触れたことに思いを熱くする。また、写真家としてのこだわりから、雪中での馬搬撮影の機会を得ての取材では、山仕事としての馬搬の写真がまるで一幅の絵のようにページに収まっている。「時には、運ばれる丸太に立ち、馬轡のようにスーッと移動してゆく岩間さん(注・馬主)。な

かなか美しい景色になっているのであった。」そして、機械を使わない仕事ならではの美しさもある。「重機を使う搬出では、一つの作業、一つの移動に、大きな機械音がつきものだが、時折の岩間さんの声と、時々馬の鼻息ぐらいいで、まったく静かなままの山である。」

(中村好至恵)



■1月の理事会は休会でした。

ルーム目誌 1月

7日 スケッチクラブ

11日 フォトクラブ
12日 資料映像委員会
13日 国際委員会 二火会
14日 図書委員会 スケッチクラブ
24日 財務委員会 会報編集委員

図書受入報告(2021年12月~2022年1月まで)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
富樫信樹・斎藤幹雄(編)	アルパインスケッチクラブ創立30周年記念 : 上高地穂高の吊り尾根	18×26cm	富樫信樹・他(私家版)	2021	発行者寄贈
安井康夫(編)	雪上散歩 (No.31) : アルパインズスキークラブ創立30周年記念号	172p/26cm	JACアルパインズスキークラブ	2021	発行者寄贈
丸山美和・栃木県猟友会	下野獺師伝 : 聞き書き 獺師たちの物語	272p/19cm	随想舎	2021	出版社寄贈
南里章二	世界史を歩く : 新全世界紀行	476p/21cm	ナカニシヤ出版	2021	出版社寄贈
京都トレイルガイド協会(編著)	京都一周トレイル マップ&ガイド 全5コース・14ルートを楽しむ	144p/22cm	ナカニシヤ出版	2021	出版社寄贈
稲葉香	西ネパール・ヒマラヤ最奥の地を歩く : ムスタン、ドルポ、フムラへの道	176p/21cm	彩流社	2022	出版社寄贈
嶋岡章	関西登山史	290p/26cm	嶋岡章(私家版)	2021	著者寄贈
若林忠男・大槻雅弘(編)	聳嶺 新世紀第14号 創立15周年記念号	138p/26cm	一等三角点研究会	2021	発行者寄贈
一等三角点研究会(編)	一等三角点手帳 2021年度	71p/21cm	一等三角点研究会	2021	発行者寄贈
一等三角点研究会(編)	百低山 一等三角点 訪ね探してタッチする	219p/21cm	一等三角点研究会	2021	発行者寄贈
渡辺悌二・白坂蕃(編著)	変わりゆくミールの自然と暮らし : 持続可能な山岳社会に向けて	408p/21cm	ブイツーソリューション	2021	著者寄贈
出利葉義次	赤石岳、謎の遭難 : リニア中央新幹線建設計画の隠された真実	294p/19cm	風詠社	2022	著者寄贈
富塚和衛(編著)	夫婦で歩いた四国巡礼旅日記	140p/30cm	富塚和衛(私家版)	2020	著者寄贈
深田久弥	ヒマラヤの高峰 : 8000メートル峰14座 初登頂の記録 (ヤマケイ文庫)	351p/15cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
樋口大良・子どもヤマビル研究会	ヒルは木から落ちてこない。 : ぼくらのヤマビル研究記	304p/19cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
ベン・モンゴリ(著) 浜本マヤ(訳)	グランマ・ゲイトウツのロングトレイル	368p/19cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
静岡県富士山世界遺産センター(編)	富士山巡礼路調査報告書 : 大宮・村山口登山道	340p/30cm	静岡県富士山世界遺産センター	2021	発行者寄贈
静岡県富士山世界遺産センター(編)	富士山巡礼路調査報告書 : 須走口登山道	338p/30cm	静岡県富士山世界遺産センター	2018	発行者寄贈
世界遺産センター・富士宮教育委員会(編)	富士山表口の歴史と信仰 : 浅間大社と興法寺	104p/30cm	静岡県富士山世界遺産センター	2021	発行者寄贈
内田嘉弘	ブランカとワイワッシュ山群の山と野鳥 : ベルー・アンデス	74p/21cm	内田嘉弘(私家版)	2022	著者寄贈
角明男	素晴らしき山の仲間と夢を叶えて : 50年の記憶	54p/30cm	角明男(私家版)	2021	著者寄贈
Moein, Amin	Noshaq : A Different Peak	96p/21cm	Sanaee Publisher	2010	著者寄贈

会

27日 学生会部

31日 二火会

1月来室者 67名

会員異動

物故

神原 達(4366)

21・12・25

進藤 昭(4760)

22・1・2

田村英也(5956)

21・12・28

水野 勉(7902)

22・1・2

藤井法道(11533)

22・1・12

退会

木村亥三雄(12778) 京都・滋賀

山崎悦美(16452) 東海

松井直弘(16703) 関西

谷田正昭(A0192)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆講演会のお知らせ

東京多摩支部

演題 冒険家と6つの旅の物語

講師 神長幹雄氏

日時 3月21日(祝・月)10時

場所 国分寺市立cocobun:プラ

ザリオンホール(国分寺

駅北口WESTビル5階)

定員 100名

申込み ①東京多摩支部HP内の

申込みフォームから。UR

L: <https://jac.tokyo/> も

しくは②メールにて、住所、

電話番号を明記の上、左記
へお申し込みください。✉ sounu.tama.yama@gmail.com

問合せ先 土井友子

TEL 090-7942-3932

◆山の自然学講座2022

山の自然学クラブ

山の自然学クラブでは1月29日

から6月14日まで連続講座「山の

自然学講座2022」を実施しま

す。室内講座、オンライン講座、日

帰りの現地講座を合わせ11回。各

回で申込み・参加も可能ですが、通
し受講には割引価格の設定があり
ます。詳細案内、講座内容はホー
ムページでご覧ください。 <http://www.shizen.or.jp/basic/>

山の自然学クラブ 理事長・大蔵

喜福 TEL 03-3341-3953

《日程と内容》1月29日小泉武栄

(OL+録)、2月19日柿崎喜宏(O

L+録)、3月5日増澤直(会場)、

3月19日小泉武栄(現・東村山)、

3月22日多田多恵子(OL+録)、

4月9日石井誠治(現・浜離宮恩

賜公園)、4月23日佐藤篤司(会場、

5月14日池田明彦(現・深大寺)、

5月28日増澤 直(現・三頭山)、

6月4日小泉武栄(現・鳩ノ巣溪

谷)、6月19日下野綾子(OL+録)

《注記》OL+録は当日オンライン

(Zoom)+数日後に録画動画講

座、会場は会場開催の室内講座・

オンラインなし、現日帰り現地

講座。

各講座ごとに3500円。通し

受講および山の自然学クラブ会員、

認定ガイドは割引価格が設定され

ています。

◆編集後記◆

●新連載「ご当地アルプス登山案
内」に誘われて、早速、鎌倉アルプ
スを歩いてきました。コースは建
長寺から大平山へと歩き、瑞泉寺
に下山しました。遥かに富士山や
丹沢山塊を望み、鎌倉の街並みと
相模湾を見下ろしながらのハイキ
ングは、行き交う人も多くなく、格
好の冬の陽だまり散歩でした。●瑞泉寺は、同じ禅林でも建長寺
のような豪壮な伽藍ではなく、こ
ぢんまりとまとまった境内は質素
ながら凛としたたたずまいで、好
ましい雰囲気でした。ところが、鶴
岡八幡宮や段葛、そして小町通り
まで歩いて来ると、大河ドラマ
『鎌倉殿の13人』の影響でしょうか、
平日なのに大勢の人の波。はや瑞
泉寺の静謐さが懐かしく感じられ
た幕切れでした。(節田重節)

日本山岳会報 山 921号

2022年(令和4年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社